

新美にいみ

南吉なんきち

—

月夜に七人の子どもが歩いておりました。

大きい子ども小さい子どもまじっておりました。

月は、上から照らしておりました。子どもたちのかげは短く地べたにうつりました。

子どもたちはじぶんじぶんのかげをみて、ずいぶん大頭で、足が短いなあと思いました。

そこで、おかしくなって、笑い出す子もありました。あまりかっこうがよくないので二三歩はしってみる子

もありました。

こんな月夜には、子どもたちは何か夢ゆめみたいなおことを考えがちでありました。

子どもたちは小さい村から、半里はんりばかりはなれた本郷ほんじょうへ、夜のお祭りをみにゆくところでした。

切通しをのぼると、かそかな春の夜風にのって、ひゅうひやりやりやと笛ふえの音ねが聞えてきました。

子どもたちの足はしぜんにはよくなりました。するとひとりの子どもがおくれてしまいました。

「文六ぶんろくちゃん、早くこい」とほかの子どもがよびました。

文六ぶんろくちゃんは月の光でも、やせっぽちで、色の白い、眼玉めだまの大きいことのわかる子どもです。できるだけいそいでみんなに追いつこうとしました。

「んでもおれ、おっ母ちゃんの下駄げただもん」

と、とうとう鼻をならしました。なるほど細長いあしのさきには大きな、おとなの下駄げたがはかれています。

た。

二

本郷にはいるとまもなく、道ばたに下駄屋さんがあります。

子どもたちはその店にはいってゆきました。文六ちゃんの下駄を買うのです。文六ちゃんのお母さんにたのまれたのです。

「あののい、おばさん」と、義則君が口をとがらして下駄屋のおばさんにいいました。

「こいつのい、樽屋の清さの子どもだけどのい、下駄を一足やっとくれや。あとから、おっ母さんが銭もつてくるげなで」

みんなは、樽屋の清さの子どもがよくみえるように、

まえへおしだしました。それは文六ちゃんでした。文六ちゃんは二つばかりまばたきしてつつ立っていました。

おばさんは笑い出して、下駄を棚からおろしてくれました。

どの下駄が足によくあうかは、足にあててみなければわかりません。義則君が、お父さんかなんそのように、文六ちゃんの足に下駄をあてがってくれました。何しろ文六ちゃんは、ひとりきりの子どもで、甘えん坊でした。

ちようど文六ちゃんが、新しい下駄をはいたときに、腰のまがったおばあさんが下駄屋さんにはいってききました。そしておばあさんはふとこんなことをいうのでした。

「やれやれ、どこの子だか知らんが、晩げに新しい下駄をおろすと狐がつくというだに」

子どもたちはびっくりしておばあさんの顔をみまし

た。

「嘘だ、そんなこと」

とやがて義則君がいました。

「迷信だ」

とほかのひとりがいきました。

それでも子どもたちの顔には何か心配な色がただよっていました。

「ようし、そいじゃ、おばさんがまじないしてやるう」

と、下駄屋のおばさんが口軽くいいました。

おばさんは、マッチを一本するまねして、文六ちゃんの新しい下駄のうらに、ちよっとさわりました。

「さあ、これでよし。これでもう、狐も狸もつきやしん」

そこで子どもたちは下駄屋さんを出ました。

三

子どもたちは綿菓子をつたべながら、稚児さんが二つの扇を、眼にもとまらぬはやさでまわしながら、舞台上で舞うのをみていました。その稚児さんは、おしろいをぬりこくって顔をいろどっているけれど、よくみると、お多福湯のトネ子でありましたので、

「あれ、トネ子だよ、ふふ」

とささやきあったりしました。

稚児さんを見ているのにあくと、くらいところについて、鼠花火をはじめたり、かんしゃく玉を石垣にぶつけたりしました。

舞台を照らすあかるい電燈には、虫がいったばいきて、そのまわりをめぐるていました。みると、舞台の正面のひさしのすぐ下に、大きな、あか土色の蛾がぴたりはりついています。

山車の鼻先のせまいところで、人形の三番叟がおど

りはじめるころは、すこし、お宮の境内けいだいの人も少なくなつたようでした。花火や、ゴム風船の音もへつたようでした。

子どもたちは山車の鼻の下にならんで、あおむいて、人形の顔をみていました。

人形はおとなも子どもともつかぬ顔をしています。その黒い眼は生きているとしか思えません。ときどき、またたきするのは、人形をおどらす人がうしろで糸をひくのです。子どもたちはそんなことはよく知っています。しかし、人形がまたたきすると、子どもたちは、なんだか、ものがなしいような、ぶきみなような気がします。

するととつぜん、パクツと人形が口をあきペロツと舌したを出し、あつというまに、もとのように口をとじてしまいました。まっかな口の中でした。

これも、うしろで糸をひく人がやったことです。子どもたちはよく知っているのです。ひるまなら、子ども

もたちはおもしろがって、ゲラゲラ笑うのです。

けれど子どもたちは、いまは笑いませんでした。ちようちんの光の中で、——かげの多い光の中で、まるで生きている人間のように、まばたきしたり、ペロツと舌を出したりする人形……なんというぶきみなものでしょう。

——子どもたちは思い出しました、文六ぶんろくちゃんの新しい下駄げだのことを。晩ばんげに新しい下駄をおろすものは狐きつねにつかれるといったあのばあさんのことを。

子どもたちは、じぶんたちが、ながく遊びすぎたことにも気がつきました。じぶんたちにはこれから帰ってゆかねばならない、半里はんりの、野中の道があったことにも気がつきました。

かえりも月夜でありました。

しかし、かえりの月夜は、なんとなくつまらないものです。子どもたちは、だまって——ちょうどひとりひとりが、じぶんのところの中をのぞいてでもいるように、だまって歩いていました。

切通し坂の上に来たとき、ひとりの子が、もうひとりの子の耳に口をよせて何かささやきました。するとささやかれた子は別の子のそばにいつて何かささやきました。その子はまた別の子にささやきました。——こうして、文六ちゃんのほか、子どもたちは何か一つのことを、耳から耳へいつたえしました。

それはこういうことだったので、「下駄屋さんのおばさんは文六ちゃんの下駄に、ほんとうにマッチをすっておまじないをしゃしんだった。まねごとをしただけだった。」

それから子どもたちはまたひっそりして歩いてゆきました。ひっそりしているとき子どもたちは考えてお

りました。

——狐きつねにつかれるというのはどんなことかしらん。文六ぶんろくちゃんの中に狐がはいることだろうか。文六ちゃんぶんろくの姿すがたや形はそのままできて、心は狐になってしまふことだろうか。そうすると、いまもう、文六ちゃんぶんろくは狐につかわれているかもしれないわけだ。文六ちゃんぶんろくはだまっているからわからないが、心の中はもう狐になってしまっているかもしれないわけだ。

おなじ月夜で、おなじ野中の道では、だれでもおなじようなことを考えるものです。そこでみんなの足はしぜんにはやくなりました。

ぐるりを低い桃ももの木でとりまかれた池のそばへ、道がきたときでした。子どもたちの中でだれかが、

「コン」

と小さい咳せきをしました。

ひっそりして歩いているときなので、みんなは、その小さい音でさえ、聞きおとすわけにはゆきませんで

した。

そこで子どもたちは、いまの咳はだれがしたか、こっそり調べました。すると——文六ちゃんがしたということがわかりました。

文六ちゃんがコンと咳をした！ それなら、この咳にはとくべつの意味があるのではないかと子どもたちは考えました。よく考えてみるとそれは咳ではなかったようでした。狐きつねの鳴き声のようでした。

「コン」

とまた文六ちゃんがいきました。

文六ちゃんは狐になってしまったと子どもたちは思いました。わたしたちの中には狐が一匹はいるっていと、みんなはおそろしく思いました。

## 五

樽屋たるやの文六ちゃんの家は、みんなの家とはすこしはなれたところにありました。ひろい、みかん畑になっている屋敷やしきにかこわれて、一軒けんきり、谷地やちにぼつんと立っていました。子どもたちはいつも、水車のところからすこしまわりみちして、文六ちゃんを、その家の門口まで送ってやることにしていました。なぜなら、文六ちゃんは樽屋たるやの清六せいりくさんのひとりきりのだいじな坊ちゃんぼろちゃんで、甘えん坊あまぼうだからです。文六ちゃんのお母さんが、よく、みかんやお菓子かしをみんなにくれて、文六ちゃんと遊んでやってくれとたのみにくるからです。今晚こんばんも、お祭まつりにゆくときには、その門口まで、文六ちゃんをむかえにいったのでした。

さてみんなは、とうとう、水車のところにきました。水車の横から細い道がわかれて草の中を下へおりてゆきます。それが文六ちゃんぶんろくちゃんの家うちにゆく道です。

ところが、今夜はだれも、文六ちゃんのことをわすれてしまったかのように、送ってゆこうとするものが

ありません。わすれたところではありません、文六ちゃんがかわいのです。

甘えん坊の文六ちゃんは、それでも、いつも親切な義則君だけは、こちらへきてくれるだろうと思って、うしろをむきむき、水車のかげになってゆきました。

とうとう、だれも文六ちゃんといっしょにゆきませんでした。

さて文六ちゃんは、ひとり、月にあかるい谷地へおりてゆく細道をくだりはじめました。どこかで、

蛙がくくみ声で鳴いていました。

文六ちゃんは、ここから、じぶんの家までは、もうじきだから、だれも送ってくれなくても、困るわけではないのです。だが、いつもは送ってくれたのです、今夜にかぎっておくってくれないのです。

文六ちゃんは、ぼけんとしているようでも、もうちゃんと知っているのです、みんなが、じぶんの下駄のことでなんといいかわしたか、また、じぶんが咳をし

たためにどういうことになったかを。

祭にゆくまでは、あんなに、じぶんに親切にしてくれたみんなが、じぶんが、夜新しい下駄をはいて狐にとりつかれたかしのために、もうだれひとりかえりみてくれない、それが文六ちゃんにはなさけないのでした。

義則君なんか文六ちゃんより四年級も上だけれど親切な子で、いつもなら、文六ちゃんが寒そうにしていると、洋服の上に着ている羽織をぬいでかしてくれたものでした（田舎の少年は寒い時、洋服の上に羽織を着ています）。それなのに、今夜は、文六ちゃんが、いくら咳をしても羽織をかしてやろうとはいいませんでした。

文六ちゃんの屋敷の外がこいになっている櫓のいけがきのところにきました。背戸口の方の小さい木戸をあけて中にはいりながら、文六ちゃんは、じぶんの小さい影法師をみてふと、ある心配を感じました。

——ひよっとすると、じぶんはほんとうに狐きつねにつかれているかもしれない、ということでした。そうすると、お父さんやお母さんはじぶんをどうするだろうということでした。

## 六

お父さんが樽屋たるやさんの組合へいって、今晚こんばんはまだ帰らないので、文六ちゃんとお母さんはさきにやすむことになりました。

文六ちゃんは初等科三年生なのにまだお母さんといっしょにねるのです。ひとり子ひとりこですからしかたないのです。

「さあ、お祭の話、母ちゃんにきかしておくれ」とお母さんは、文六ぶんろくちゃんのねまきのえりを合わせてやりながらいいました。

文六ちゃんは、学校から帰れば学校のことを、町にゆけば町のことを、映画えいがをみてくれば映画のことをお母さんにきかれるのです。文六ちゃんは話が下手ですから、ちぎれちぎれに話をします。それでもお母さんは、とてもおもしろがって、よろこんで文六ちゃんの話はなしをきいてくれるのでした。

「神子みこさんね、あれよくみたら、お多福湯たふくゆのトネ子だったよ」

と文六ちゃんは話しました。

お母さんは、そうかい、と行って、おもしろそうに笑って、

「それから、もうだれが出たかわからなかったかい」とききました。

文六ちゃんはおもいだそうとするように、眼めを大きくみひらいて、じっとしていました。やがて、祭の話はやめて、こんなことをいいだしました。

「母ちゃん、夜、新しい下駄げたおろすと、狐きつねにつかれ

る？」

お母さんは、文六ちゃんが何をいい出したかと思っ  
て、しばらく、あっけにとられて文六ちゃんの顔を見  
ていましたが、今晚、文六ちゃんの身の上に、おおよ  
そそんなことが起こったか、けんとうがつかしました。

「だれがそんなことをいった？」

文六ちゃんはむきになって、じぶんのさきの問いを  
くりかえしました。

「ほんと？」

「嘘だよ、そんなこと。むかしの人がそんなことをい  
っただけだよ」

「嘘だね？」

「嘘だとも」

「きつとだね」

「きつと」

しばらく文六ちゃんはだまっていました。だまって  
いるあいだに、大きい眼玉が二度ぐるりぐるりとまわ

りました。それからいいました。

「もし、ほんとだったらどうする？」

「どうするって、何を？」

とお母さんがききかえました。

「もし、ぼくが、ほんとに狐になっちゃったらどう  
する？」

お母さんは、しんからおかしいように笑いだしまし  
た。

「ね、ね、ね、」

と文六ちゃんは、ちよつとてれくさいような顔をして、  
お母さんの胸を両手でぐんぐんおしました。

「そうさね」と、お母さんはちよつと考えていてから  
いいました、「そしたら、もう、家におくわけにやい  
かないね」

文六ちゃんは、それをきくと、さびしい顔つきをし  
ました。

「そしたら、どこへゆく？」

「鴉根山」の方にゆけば、いまでも狐がいるそうだから、そっちへゆくさ」

「母ちゃんや父ちゃんは どうする？」

するとお母さんは、おとなが子どもをからかうときにするように、たいへんまじめな顔で、しかつべらしく、

「父ちゃんと母ちゃんは相談をしてね、かあいい文六が、狐になってしまったから、わしたちもこの世にんのたのしみもなくなってしまったで、人間をやめて、狐になることにきめますよ」

「父ちゃんも母ちゃんも狐になる？」

「そう、ふたりで、明日の晩げに下駄屋さんから新しい下駄を買ってきて、いっしょに狐になるね。そうして、文六ちゃんの狐をつれて鴉根の方へゆきましよう」

文六ちゃんは大きい眼をかがやかせて、

「鴉根 って、西の方？」

「成岩から西南の方の山だよ」

「深い山？」

「松の木がはえているところだよ」

「猟師はいない？」

「猟師って鉄砲打ちのことかい？ 山の中だからいるかも知れんね」

「猟師が撃ちに来たら、母ちゃんどうしよう？」

「深い洞穴の中にはいって三人で小さくなっていればみつからないよ」

「でも、雪が降ると餌がなくなるでしょう。餌をひろいに出たとき猟師の犬にみつかったらどうしよう」

「そしたら、いっしょうけんめい走ってにげましよう」

「でも、父ちゃんや母ちゃんはやいでもいいけど、ぼくは子どもの狐だもん、おくれてしまうもん」

「父ちゃんと母ちゃんが両方から手をひっぱってあげるよ」

「そんなことをしてるうちに、犬がすぐうしろにきたら？」

お母さんはちょっとだまっています。それから、ゆっくりいいました。もうしんからまじめな声でした。

「そしたら、母ちゃんは、びっこをひいてゆっくりいきましよう」

「どうして？」

「犬は母ちゃんにかみつくでしょう、そのうちに獵師りゅうしがきて、母ちゃんをしばってゆくでしょう。そのあいだに、坊ぼうちょうやお父ちゃんはにげてしまうのだよ」

文六ぶんろくちゃんはびっくりしてお母さんの顔をまじまじとみました。

「いやだよ、母ちゃん、そんなこと。せいじゃ、母ちゃんがなしになってしまっじゃないか」

「でも、そうするよりしようがないよ、母ちゃんはびっこをひきひきゆっくりゆくよ」

「いやだったら、母ちゃん。母ちゃんがなくなるじゃないか」

「でもそうするよりしようがないよ、母ちゃんは、びっこをひきひきゆっくりゆくり……」

「いやだったら、いやだったら、いやだったら！」

文六ちゃんはやめきたてながら、お母さんの胸むねにしがみつきました。涙なみだがどっと流れてきました。

お母さんも、ねまきのそででごっそり眼めのふちをふきました、そして文六ちゃんがはねとばした、小さい枕まくらをひろって、あたまの下にあてがってやりました。

## 「狐」

※『新装版 新美南吉童話集2 おじいさんのランプ』（2012年12月1日、大日本図書株式会社）の「狐」をもとに一部、漢字表示とルビを編集しました。

※このテキストを個人的に読む以外の利用をされる場合には、新美南吉記念館までご連絡ください。(TEL : 0569 - 26 - 4888)